

Citation: Russ TC, Morling JR. Cholinesterase inhibitors for mild cognitive impairment. Cochrane Database of Systematic Reviews 2012, Issue 9. Art. No.: CD009132. DOI: 10.1002/14651858.CD009132.pub2.

CRG名: Cochrane Dementia and Cognitive Improvement Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 7 AUG 2012

Clib issue No.: N/U: 2012 Issue 9; N

アブストラクト

背景: 軽度認知障害は、認知症の前臨床段階を表すものと仮定されるが、予後の異なる多様な集団から成っている。

目的: 軽度認知障害患者に対するコリンエステラーゼ阻害薬投与の安全性と有効性を評価する。

検索戦略: 主要な医療データベース(MEDLINE、EMBASE、CINAHL、PsycINFO及びLilacs)により頻繁に更新されるCochrane Dementia and Cognitive Improvement Group's Specialised Register並びに試験登録、灰色文献から試験を同定した。

選択基準: 軽度認知障害患者への全てのコリンエステラーゼ阻害薬投与に関する二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験。

データ収集と分析: 選択した試験の発表済み報告書からデータを抽出し、適切であればメタアナリシスに統合し、治療の有効性及び有害事象リスクを推定した。

主な結果: 軽度認知障害(但し確定した例)患者5,149名を含む9件の試験(8件の発表済み報告書から得る)をレビューに含めた。試験の実施期間が各々異なるため、結果の統合は限られていた。認知症への移行を報告している3件の試験のメタアナリシスでは、1年目、2年目又は3年目に認知症へ進展することに対して、コリンエステラーゼ阻害薬が有益な効果を持つという強力なエビデンスは得られなかった。2年目に認知症へ移行するリスク比(RR)は全体として有意差を示したが[0.67、95%信頼区間(CI)0.55~0.83]、この結果は同一の論文に報告された2件の試験のみに基づいたものである。認知機能検査のスコアへのコリンエステラーゼ阻害薬の効果は基本的にまったく認められなかった。

4,207名の患者からの結果によれば、コリンエステラーゼ阻害薬投与群では有意に有害事象が多かったが(RR 1.09、95%CI 1.02~1.16)、重篤な有害事象又は死亡例はなかった。胃腸系の副作用はそれよりはるかに頻度が高かった(下痢:RR 2.10、95%CI 1.30~3.39;悪心:RR 2.97、95%CI 2.57~3.42;嘔吐:RR 4.42、95%CI 3.23~6.05)。いずれの群も心合併症はそれほど多くないようであった(RR 0.71、95%CI 0.25~2.02)。コリンエステラーゼ阻害薬投与群に有意に高頻度であると報告されたその他の副作用は、筋けいれん/こむらがり(RR 7.52、95%CI 4.34~13.02)、頭痛(RR 1.34、95%CI 1.05~1.71)、失神又はめまい(RR 1.62、95%CI 1.36~1.93)、不眠症(RR 1.66、95%CI 1.36~2.02)及び異常な夢(RR 4.25、95%CI 2.57~7.04)であった。

レビューアの結論: 軽度認知障害においてコリンエステラーゼ阻害薬が認知症への進展又は認知機能検査結果に影響するというエビデンスはほとんどない。この不十分なエビデンスに比べて、有害事象、特に胃腸系の有害事象のリスク増加は圧倒的である。コリンエステラーゼ阻害薬は軽度認知障害患者に推奨すべき薬剤ではない。

簡易な要約(Plain language summary)

記憶に問題はあるが認知症ではない患者に対する抗認知症薬

認知症は非常にありふれた疾患であり、高齢者集団にあつては、今後数年のうちにますます重要性を増すであろう。早期の診断と治療により、認知症患者の自立性が保たれ、在宅生活を送ることがより長期間にわたって可能となる。コリンエステラーゼ阻害薬(「抗認知症薬」)はアルツハイマー病(認知症の最も頻度の高い原因)患者に使用し、認知症と診断がつけば即時に投与開始可能である。しかし上記薬が、記憶に多少の問題はあるが認知症ではない患者に有効又は本当に安全であるか否かは不明である。この集団のうち、どの患者が認知症を発症するか予測するのは非常に困難で、一部の患者で(認知障害が)改善し、記憶能力が正常に戻る場合もある。上記薬剤が3年を超えて認知症発症を予防するというエビデンスはきわめて乏しく、上記薬剤服用患者は悪心、嘔吐及び下痢並びに筋けいれん／こむらがえり及び異常な夢など多くの副作用を経験する。

(監訳 大神 英一)

翻訳公開日:2013年1月30日

ご注意:この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。